音楽部会

＜県研究主題＞
　多様な音楽活動を通して、音楽文化の理解を深め、音楽的を愛好する心情や豊かな感性、音楽的な能力の基礎を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　岩撫　千鶴（県央地区）

＜研究主題＞
豊かに響きあう合唱づくりの工夫
～３年間の実践～

１　提案内容

少ない授業時数の中、生徒の持つ感性をより豊かにし、技能と表現の向上を目指す合唱づくりをテーマに、心に響く音楽をめざし実践している。多くの生徒が「発声を意識した声づくり」が未経験な状態であるが、それを敢えてプラスにとらえ、個々をさらに生かすこと、伸ばすことを皆で取り組んでいくことが、中学校３年間での大きな成長になるということに理解を向けた。

（１）　３年間の実践

①　【１年次の取り組み】　ＣＯＳＭＯＳ

ア　姿勢　～格好良く美しく～

足は肩幅、手は横に自然に、膝、腿、お尻を軽く引き締め、顎を引き、首筋を伸ばす、目線は遠くに、重心は前に、胸を張り、格好良い姿勢・美しい姿勢を意識させる。

イ　呼吸法（腹式呼吸）　～ブレスコントロール～

・腹筋や背筋を意識するアクティブな活動。

・丹田（たんでん）や横隔膜を意識するブレスコントロール。

ウ　口の形

頬に指を当て、指が口の中の歯に当たらないよう歯を開いて、声の出口を開く。（飴玉法）

エ　のどを広げる・口の中の形　～あくび体操～

のどの奥を広げて息や声の通り道を作り柔らかく響く声を作るため、「あくび」を数回させる。

②　【２年次の取り組み】　春に

ア　音域の拡大　～身体から発する声・響きづくり～

イ　声部に即した発声・発音

・［女声］チェンジヴォイスの徹底・子音を意識した発音での歌唱

・［男声］声質・響きのまとまり・丁寧になめらかな発音

ウ　３部合唱の取り組み（ハーモニー作りや曲の構成・強弱などを表現）

・～声質・響き・バランス・ピッチを正確に～

③　【３年次の取り組み】　大地讃頌

ア　声量の増幅と全体のバランス作り　～太く厚みのある声を目指し、表現の幅を広げる～

イ　曲想にふさわしい発音での歌唱・音色（声色）の工夫

ウ　４部合唱の取り組み（ハーモニー作り・アカペラでピッチを感じながら）

・～響きの統一感と曲想を意識して～

（２）　成果と課題

「系統だった３年間での声作り」は、この５～６年でおおよそ形になってきた。特に、生徒たち自らが表現を工夫しようと意識し、「聴く」ことを重視した「アカペラ」での練習を多く取り入れたことによって、響きの質、各パートのバランス調整、正確な音程に対する意識が高くなった。

今後の課題として、視聴覚・情報機器等を工夫して利用することで、個の力をより高めるための実技の時間を確保することや、幅広い音楽に触れ、その良さや特質を感じ取らせる授業の工夫、表現力・技能力の向上のための発声指導など、さらなる研究と工夫が必要だと感じた。

２　協議内容

テーマ：【創意工夫して表現（歌唱・合唱）する力を育成する学習指導の工夫】

〇思考の課程を重視する。ワークシートの工夫・活用→振り返り→見通しを持てる。
全体で共有する。

〇グループワークで良さを発表し共有。歌う時間と言語活動の時間のバランス。

〇アクティブ（楽しい・喜び）→深める→創意工夫する。

〇Ｂに達しない生徒への配慮を丁寧に行う。

〇リズムを体感させ、楽しいと感じさせる。気持ちから入る→工夫して歌う→違いを感じさせる。

〇キーワードは「共通認識」。聴き合う、皆で歌う、話し合い。

〇共通事項をしっかり押さえて曲を深める。

〇言語活動を大切にする。

〇3 年間を見通した指導。発達段階が分かる取り組みを行う。

〇教員側も生徒にさまざまなしかけをする。そのために教員も常に学ぶことが大切である。

３　助言

（１）　～今回の提案から～

①　生徒の実態に即した指導を行うことが大切である。何ができていて何が足りないかを把握することで、個々を生かすことができる。

②　小学校の内容を見通した 3 年間の指導計画を立てることで、音楽の基礎→音域の拡大→曲想の工夫へとつながり、無理なく子どもたちを導くことができる。上級生の合唱活動に目標の姿を見出すことで、「あんな 3 年生になりたい」と肯定的な姿勢へとつながる。

③　限られた音楽の授業数のなかで、いかに音楽を愛好する心情を育てていくか。

④　教員が情熱を持ってパワフルに指導することで、その姿勢が子どもに伝わる。その中で「わかった」「できた」という成功体験をしていく。

（２）　～おわりに～

生徒一人ひとりが主体的・創造的に音楽活動に取り組むためには、音楽の共有体験が大切であり、子ども自身が学び合うことで表現力を養っていく。その際は、分かりやすい言葉で丁寧に伝え、自ら感じ取らせることが必要である。音楽は、人の心を癒やし、勇気づけることができる。「音楽の持つ力」を子どもに伝え、生涯にわたり音楽を愛好する心を育てていきたい。

提案２　　提案者　三浦　芳子（川崎地区）

＜研究主題＞
音楽を形づくっている要素から生み出す創造的な「創作」
―　子どもたちが発想をふくらませ、見通しをもってつくるための指導の工夫　―

１　提案内容

川崎市内の小中学校教員へのアンケートを行ったところ、８割の教員が「音楽づくり」や「創作」の授業を行う時に「効果的な進め方がなかなか思いつかない」と答えた。そこで、教員にとって取り組みやすく、生徒たちにとって楽しく達成感がある「音楽づくり」や「創作」の指導の工夫を考えることが必要だと考え、本研究テーマを設定した。生徒がリズムや強弱、速度、反復といった音楽を形づくっている要素に気付き、それらを手掛かりとしながら発想を得て意欲を高め、見通しをもって音楽づくりができるような指導の工夫を試みた。

（１）実践上の工夫・・・主な工夫は、次の４点である。

ア　「創作」に至るまでの仕掛けと音楽的な約束事の提示
イ　工夫のポイントを明確にするための発問や投げ掛けの工夫
ウ　共有や振り返りの場の設定
エ　鑑賞との関連

①　実践例１「旋律と伴奏が重なり合う美しさを味わおう －８分の６拍子にのせて旋律創作-」

ア　発声練習で歌い慣れている「Piacer d’amor」と既習曲「浜辺の歌」の２曲の旋律を比べ、音楽を形づくっている要素が似ていることに気付かせた。そして、その特徴を旋律創作のルールとすることで、生徒はそれらのルールを音で理解していくことができた。

イ　創作途中の段階で、効果的な工夫をしている生徒の作品と思いや意図を紹介することで生徒の発想がふくらみ、一人ひとりが作品への思いや意図をもつことにつながった。

ウ　完成した作品を４人の小グループで発表し合った。生徒自身が創作の場面で意識してきた音楽の要素を、友達の作品から聴き取り、その良さを共有することにつながった。

エ　鑑賞の学習の中でも、分散和音の伴奏や旋律の特徴に気付き、揺れるような８分の６拍子、旋律と伴奏が一本化した美しさを聴き味わう姿が見られ、創作で学習したことの意味を再認識させることができた。

②　実践例２「手組や我が国の伝統音楽の特徴を生かしたリズムを創作しよう」

ア　まず教員が手組をつくる例を示すことで、生徒が学習に見通しをもって取り組むことができた。また、２枚の抽象絵画を提示し、手組の唱歌をつくる時の発想につなげた。創作のルールは、音で聴かせた後に図式化した音楽の構成を掲示物で示した。ルールを最小限にしたことが、実際の音に出して試しながらつくる活動につながり、生徒の発想をふくらませることができた。

イ　創作の途中で能を聴き、音楽の特徴について気付いたことを話し合う時間を設定した。これまでの学習経験との関連を図りながら、発問や投げ掛けを行い、生徒に工夫のポイントを理解させることができた。

ウ　各グループの発表を全員で聴き合う活動を行った。教員の価値付けで生徒はそのポイントに着目し、作品をより深く味わうことにつながった。

エ　創作の学習の後に、能「石橋」を鑑賞した。グループ活動を通して、「間」や速度の変化など、我が国の音楽の特徴に気付き、そのよさを味わうことができた。

（２） 成果

本研究での一番の成果は、生徒たちが意欲的に学習に取り組み、ほぼ全ての生徒が一人ひとりの思いを込めた作品を作り上げたことである。そして、２つの実践授業から明らかになったのは、「創作」の学習のどの場面においても、生徒たちが音楽を形づくっている要素の働きを感じ取ることを大切にしていく必要があるということである。また、「創作」の学習は、生徒が音や音楽に対する感性を高めることができる創造的な学習だということを再認識した。

題材の終わりに位置付けた「鑑賞」の学習では、音楽を形づくっている要素の働きを、「創作」の学習で得た音楽的感受に結び付けて感じることができた。また、「創作」と「鑑賞」との関連を図ることによって、学習に深まりをもたせることができた。

この研究成果をふまえ、教員自身がさらに感性を磨き教材開発をする中で、他領域との関連を図った題材構成を工夫していきたいと考える。

２　協議内容

「音を音楽へと構成する体験を重視した創作の指導の工夫」というテーマのもと、参加者を６グループに分け、討議・発表を行った。内容については以下のとおりである。

〇各校での実践や取組状況

リズム創作、箏・篠笛・アルトリコーダー・ピアニカなどの楽器を使った創作。箏は音が限られているので創作しやすいが、なんとなく曲になってもまとまらないという課題もある。また、楽器の数が足りない、学校事情で楽器の扱いが難しいなどの悩みを抱えている学校もある。

〇音素材を生かした曲選びや記譜の練習など、事前の準備や仕込みが重要である。学習内容、ねらい、旋律作りのルールなどを明確化することで、生徒たちの意欲につながるのではないか。

〇語彙の少ない生徒、Ｂに達しない生徒への手立てが難しい。また、評価の仕方についても課題がある。グループ学習は取り組みやすいが、一人ひとりの思いや意図をどう見取るか、個々の評価が難しい。

〇小学校との連携を深め、継続的な学びができるような体制作りが必要である。

３　助言とまとめ

学習指導要領に示されている創作の目標及び内容に即した実践研究であった。様々な教材を集める努力や情熱的に子どもに向き合っていく教員の姿勢が、生徒の学習意欲の向上や創造的な「創作」活動につながっていた。「創作」と「鑑賞」という複数の領域を関わらせた実践は、今後他の領域にも応用できるのではないか。

思いや意図を表すためには、技術的な力が不可欠なので、基礎的な知識はしっかりおさえる必要がある。「技能」と「工夫」のバランスをうまくとりながら、音楽の要素を使って自分の思いや意図を語れるような生徒を育てたい。自己肯定感が低く、主体的に取り組むことや自分の考えを他者に伝えることが苦手な生徒が増えている。どこでつまずいているのか、何をアドバイスしたら良いのか、生徒の実態をしっかり把握して指導する必要がある。

音楽表現（鑑賞）を楽しいと思える瞬間、音や音楽によって「心が動く」瞬間を様々な場面で共有し合い、主体的・創造的に表現（鑑賞）する生徒の育成を目指して研究を重ねていきたい。